

2-1. 北海道

No.	1	北海道
-----	---	-----

1. 取組の全体像

1. 自治体の概要

①	自治体名	北海道	②	担当部局名	保健福祉部 福祉局 地域福祉課
①①	人口	5,224,614(人) <令和 2 年 10 月/国勢調査>			
①②	自治体内連携	庁内連携部局	保健福祉部 福祉局 地域福祉課		
		庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・ —		
		庁内連携部局	総合政策部国際課、地域政策課、DX 推進課、環境生活部道民生活課、消費者安全課、保健福祉部総務課、地域保健課、障がい者保健福祉課、高齢者保健福祉課、子ども政策企画課、子ども家庭支援課、経済部雇用労政課、産業人材課、教育庁教育政策課、社会教育課、生徒指導・学校安全課		
	庁内連携内容 ※会議体、情報共有	ほっかいどう孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム			

2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿

①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	<ul style="list-style-type: none"> ・ ころの健康 SNS 相談窓口を設置し、自殺対策などの体制を強化(R3 年度) ・ 「北海道ケアラー支援条例」を制定(R4 年度) ・ R4 年度モデル事業参加時に PF 準備会を実施 【構成】社協、NPO 支援団体、自殺対策・ひきこもり対策団体 等 【調査】道民向け、民生委員向け、活動団体向けのアンケート実施、実態把握 【情報】「北海道支援情報ナビ」の充実化 【企画】支援者向けシンポジウムの開催 ・ 令和 5 年度 10 月に PF を開催 ⇒各地域への周知啓発を実施 			
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象者の住民を取り巻く環境	最終的なゴール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道内各地域の実情にあわせて、官民連携プラットフォームが設立され、対策に取り組んでいる ・ 孤独・孤立対策に関する道民全体の理解が進んでいる ・ 必要なときに支援情報にアクセスする環境ができています 		
		今年度のゴール	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域版の連携 PF として振興局の PF のあり方の整理 ・ 啓発イベントの開催及び広報活動による一般道民の機運醸成 ・ 研修会の開催による自治体職員等のスキルアップと理解促進 ・ 広報による北海道支援情報ナビの認知度向上 		

3. 地方版連携 PF における連携体制

①	地方版連携 PF (全道単位)	幹事会員:北海道、道社協、北海道 NPO サポートセンター、自殺対策・ひきこもりの家族やひとり親家庭の当事者の全道組織等 14 団体 会員:市町村、市町村社協、その他の団体		
		選出・打診時の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幹事会員は昨年度の準備会の参加者を中心とする ・ 会員は市町村や市町村社協、支援情報ナビに登録を行った民間支援団体に参画を打診 	
	地域版連携 PF (振興局単位)	振興局、市町村、自立相談支援機関、市町村社会福祉協議会および関係団体		
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	選出・打診時の工夫	・ —	
		選出・打診時の工夫	・ —	

4. PF 連携による価値や工夫_考え方

【全道の PF】

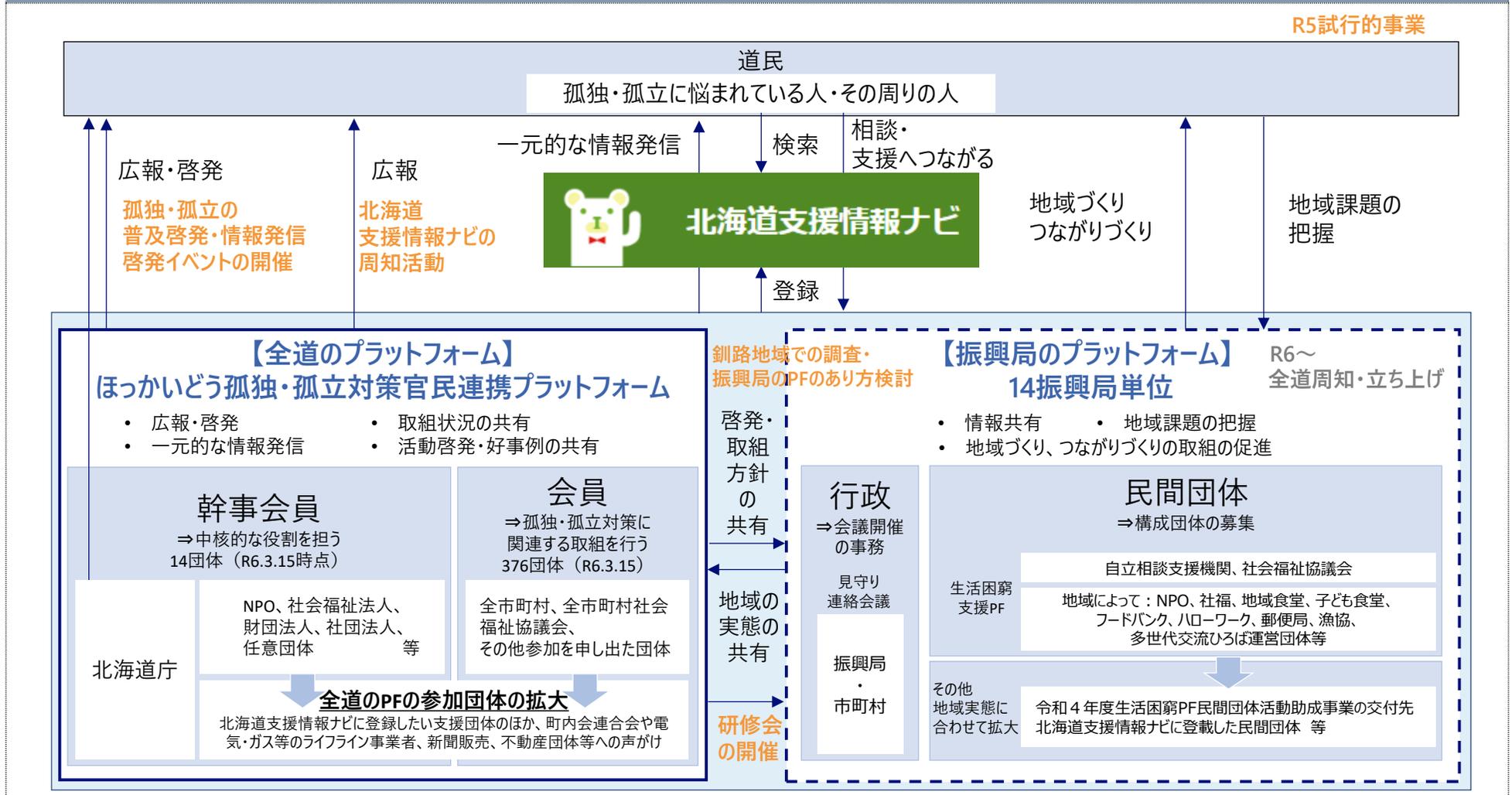
- ・ 情報共有、広報・啓発、支援情報の一元化、連携した取組の好事例の共有

【振興局の PF】

- ・ 情報共有、地域課題の把握、地域づくり、つながりづくりの取組の推進を担う
- ・ わかりやすい行政単位、十分な理解の下での推進、できるだけ負担を少なくすることに留意し、14 振興局ごとに、既存の組織体をベースとして設置し、福祉のつながりから、福祉以外の取組に広げる

2. 連携 PF イメージ

5. 連携プラットフォームのイメージ図



ほっかいどう孤独・孤立対策官民連携 PF の構成団体は以下の通りである。(令和6年3月時点)

北海道庁内の関係課	総合政策部国際課、地域政策課、DX推進課、環境生活部道民生活課 消費者安全課、保健福祉部総務課、地域保健課、地域福祉課、障がい者保健福祉課 高齢者保健福祉課、子ども政策企画課、子ども家庭支援課、経済部雇用労政課 産業人材課、教育庁教育政策課、社会教育課、生徒指導・学校安全課
幹事会員 ※北海道以外の13団体	① (社福)北海道社会福祉協議会 ② (特非)北海道NPOサポートセンター ③ (社福)北海道いのちの電話、 ④ 道南ひきこもり家族交流会「あさがお」 ⑤ 北海道ひきこもり成年相談センター/札幌市ひきこもり地域支援センター ⑥ (一社)北海道総合研究調査会 ⑦ (一社)北海道ねっとわーく ⑧ 北海道児童養護施設協議会 ⑨ (社福)北海道母子寡婦福祉連合会 ⑩ 北海道シェルターネットワーク ⑪ (公財)北海道民生委員児童委員連盟 ⑫ 北海道地域定着支援センター ⑬ 登別市
会員 376 団体 (R6.3.15)	全市町村 全市町村社会福祉協議会 参加を申し出た団体 ・認定 NPO 法人まちづくりスポット恵み野 ・NPO 法人もったいないわ・千歳 ・一般社団法人ペアチル ・認定 NPO 法人ふまねっと ・特定非営利活動法人 いこい ・北海道レインボー・リソースセンター L-Port ・特定非営利活動法人 CAN ・住宅確保要配慮者居住支援法人 株式会社 AIMS ・特定非営利活動法人 エンリッチ

振興局は以下の 14 か所である。

振興局	所在地	市	町	村
空知	岩見沢市	10	14	
石狩	札幌市	6	1	1
後志	倶知安町	1	13	6
胆振	室蘭市	4	7	
日高	浦河町		7	
渡島	函館市	2	9	
檜山	江差町		7	
上川	旭川市	4	17	2
留萌	留萌市	1	6	1
宗谷	稚内市	1	8	1
オホーツク	網走市	3	14	1
十勝	帯広市	1	16	2
釧路	釧路市	1	6	1
根室	根室市	1	4	

3. 試行的事業一覧

6. 本年度に取り組む試行的事業の概要

試行的事業のポイント・工夫		<ul style="list-style-type: none"> 振興局の PF の構築を検討し、全道の PF と役割分担して、地域づくりを進められる体制を整理する。 研修会や啓発イベントにおいて、今まで孤独・孤立の課題を知らなかった人を巻き込み機運を醸成する。 			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	地域版の連携 PF のモデル事業	<ul style="list-style-type: none"> 振興局の PF の構築に向けて、釧路地域をモデル地域として地域の関係団体との意見交換を実施し、スキーム、活動内容、全道の PF との役割の棲み分け等を検討した。 具体的には、振興局、釧路市、一般社団法人釧路社会的企業創造協議会、釧路地区食でつながるネットワークとの意見交換を実施し、生活困窮支援 PF、見守り連絡会議といった連携組織体をベースとすることや、民間との共同事務局化等を協議することなどをとりまとめた。R6 年度以降、全道に周知をしていく予定である。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域課題を踏まえた、地域に求められる PF のあり方が整理できていること 次年度以降、各振興局の PF の形成にむけたモデルを形成すること 	1月18日 一般社団法人釧路社会的企業創造協議会、釧路地区食でつながるネットワーク 意見交換 1月30日 釧路市 意見交換	— 費用なし
②	道内基礎自治体の職員等を対象とした研修会	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもりをテーマに市町村や支援者等を対象とした研修会を開催し、課題そのものの周知や、支援方法についての理解を促進した。 著名な講師により関心をもってもらい、活動が活発ではない地域においても、現状把握や対策に乗り出すきっかけ作りとする。 現地開催することで、道内各地域の状況を道として把握するとともに、職員同士が課題を共有し合う機会を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> 孤独・孤立、ひきこもりの課題について知ってもらうこと 活動をしていない地域で新たに活動をはじめってもらうこと 	1月29日 (月)	310万円 北日本広告社
			成果検証結果 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 意見交換により振興局の PF や地域づくりへの期待等を把握した。 ✓ 振興局の PF の立ち上げ時の体制や、参画メンバーの想定、全道の PF との役割分担等を取りまとめた。 	成果検証結果 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 342 名の方に参加いただき、108 名の方にアンケートに回答いただいた。 ✓ ひきこもりや孤独・孤立が誰にでも起こりうることを約 3 割の方に認知いただいた 	
③	道民を対象とした啓発イベント	<ul style="list-style-type: none"> 休日のショッピングモールで音楽を交えたトーク形式の啓発イベントを開催。フォロワー数の多い 20 代のユーチューバー、自らひきこもりを経験したインスタグラマーと講師の鼎談を行い、一般道民への孤独・孤立問題とゆるやかなつながりの大切さの理解を促した。広報動画の上映や、道独自の孤独・孤立対策のロゴ、相談先情報付きのグッズの配布を行い、相談窓口の周知も合わせて行った。グッズはメモ帳や冷蔵庫に貼れるクリップといった長く使い、目に触れるものに支援情報を載せ、工夫した。 	<ul style="list-style-type: none"> 一般道民に孤独・孤立、身近にある支援について知ってもらえていること 	2月23日 (金・祝)	180万円 北日本広告社
			成果検証結果 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 400 個のグッズを会場にて配布した。 ✓ 78 名の方がアンケートに回答し、2 割が課題そのもの、半数の方が誰にでも起こりうることを初めて知ったと回答した。 		

④	孤独・孤立に関する広報ツールの作成	<ul style="list-style-type: none"> 孤独・孤立対策の機運を醸成するために、道独自のロゴマークやポケットティッシュ、広報動画を作成、研修会やイベント、各地域で配布。関係課の意識啓発のためにロゴマーク入りのシャープペンシルを作成し配布。 	<ul style="list-style-type: none"> 孤独・孤立の問題について知ってもらうこと 	12月～2月	170万円 (株)インサイト
			成果検証結果 <ul style="list-style-type: none"> ✓ ポケットティッシュを2回のイベントで約1,000個配布、道内市町村でも配布した。 ✓ 広報動画を啓発イベントの集客に活用した。 ✓ 研修会やイベントでのティッシュの配布や動画の放映により、一度に多くの方に孤独・孤立の問題について知ってもらうきっかけを提供できた。 		
⑤	北海道支援情報ナビの広報活動	<ul style="list-style-type: none"> 普及促進のため、昨年度の自治体窓口に加えて、公共施設における広報活動を実施した。具体的には、チラシ、カード、配布用ステッカー、施設(来庁者トイレ等)貼り付け用ステッカーを作成、配布したほか、研修会やイベント等でも配布した。 	<ul style="list-style-type: none"> より多くの人に北海道支援情報ナビを知ってもらうこと 	1月～2月	105万円 北海道ねっとわーく
			成果検証結果 <ul style="list-style-type: none"> ✓ 公共施設で手に取る姿が見られた。 ✓ 啓発イベントのアンケートでは、87%の人が初めて支援情報ナビを知ったと回答した。 		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列挙

- 14振興局での振興局のPFの立ち上げ

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- 10月の全道のPF会議は地元紙に取り上げられた。
- 研修会や啓発イベントのアンケートでは、行政が取り組んでいることを知って良かったという声や、こういった取り組みを継続してほしいといった意見が出た。

4. 連携PFの行程および実務上の留意点

【広域自治体ならではの取組】 ※下の留意点では、広域自治体ならではの取組に **広域** マーク記載

<p>① 基礎自治体との階層化、役割の整理</p>	<p>■全道の PF と振興局の PF の方向性や役割分担についてあり方を整理した 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 全道の PF では情報共有、広報・啓発、支援情報の一元化、連携した取組の好事例の共有を実施し、振興局の PF では、地域課題の把握、地域づくり、つながりづくりの取組の推進を実施する。
<p>② ガイドラインを示す、進捗管理をする</p>	<p>■振興局の PF の立ち上げにむけた理解促進 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 振興局の PF については、今年度取りまとめた内容を全道に周知するとともに、モデル地域をはじめとした各地で PF の立ち上げを目指す。 理解が不十分だと、既存施策との違いが曖昧なままの、“ふわっとした”イメージ先行の取組となることや、関係者の熱量に差が生じることで、行き詰まる懸念があることから、地域の関係者すべてが孤独・孤立対策の重要な理念である「予防」や「地域づくり」、「つながりづくり」を十分理解する必要がある。R6 年度に施策説明会を通じて、道本庁から振興局に周知し、振興局から市町村や支援団体に理解を求める。 適宜道庁において、各地域の取組状況を把握する。
<p>③ 基礎自治体への情報発信・機運醸成</p>	<p>■全道の PF により、地域の啓発、広報を進める。 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 都道府県レベルでのプラットフォームは、広報啓発や支援情報の一元化、連携した取組の好事例の共有などの面では効果的である。 <p>■全道の PF と振興局の PF で、全道での一元的な情報発信と地域に根差した「地域づくり」「つながりづくり」を分担する 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 面積が広大で市町村数が多い中、全道の PF では「地域づくり」の推進はなじまないことから、地域の実情に応じた PF を形成し、全道の PF と役割分担の上で推進する。わかりやすい行政単位、十分な理解、できるだけ負担を少なくすることに留意し、道が設置主体となって 14 の振興局単位で設置する。
<p>④ 基礎自治体の人材育成</p>	<p>■著名な講師による研修会を開催し、一般参加者向けに周知活動も合わせて実施した 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> ひきこもりをテーマに市町村や支援者等を対象とした研修会を開催し、課題そのものの周知や、支援方法についての理解を促進した。講演会の前に自治体職員同士対面の情報交換会を開催した。

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	<p>■孤立死対策、生活困窮支援を担っていた課が担当</p> <ul style="list-style-type: none"> 孤立死対策、生活困窮支援を担っていた保健福祉部福祉局地域福祉課が担当した。
②	地域の現状把握	<p>■過年度の事業において、道民、民生委員、各地域への実態調査を実施した</p> <ul style="list-style-type: none"> 過年度の事業で、道民、民生委員、各地域への調査を実施している。孤独感が「常にある・しばしばある」と回答した方の割合が、同時期に実施された国による調査よりも、やや高いこと等を把握した。
③	連携 PF の運営形態の検討	<p>■全道の PF と振興局の PF で、全道での一元的な情報発信と地域に根差した「地域づくり」「つながりづくり」を分担する 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 面積が広大で市町村数が多い中、全道の PF では「地域づくり」の推進はなじまないことから、地域の実情に応じた PF を形成し、全道の PF と役割分担の上で推進する。わかりやすい行政単位、十分な理解、できるだけ負担を少なくすることに留意し、道が設置主体となって 14 の振興局単位で設置する。

(イ)準備段階		
④	地域課題の詳細調査	<p>■振興局の PF の設立にあたってモデル地域において意見交換を実施した</p> <ul style="list-style-type: none"> 振興局の PF の設立にあたって、釧路総合振興局をモデル地域として選定し、活動する民間団体および自治体と現状の課題や、振興局の PF の方向性等について意見交換を実施した。 市や地域の支援団体に課題認識や現状の取組をヒアリングすると同時に、振興局の PF について、道としての考えを提示し、方向性や役割分担について意見交換を行い、あり方を整理した。
⑤	連携 PF の運営形態・体制の検討	<p>■全道の PF と振興局の PF の方向性や役割分担についてあり方を整理した 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> 全道の PF では情報共有、広報・啓発、支援情報の一元化、連携した取組の好事例の共有を実施し、振興局の PF では、地域課題の把握、地域づくり、つながりづくりの取組の推進を実施する。 <p>■振興局の PF においては、既存の広域的な連携組織体をベースとして発展させる</p> <ul style="list-style-type: none"> 着実な形成と進化の観点から、まずは孤独・孤立の要因の一つである「生活困窮」や、この問題の最悪の形での表出である「自死」や「孤立死」防止のための地域づくりに資するものとするを優先し、その後、できる限り福祉関係者だけに留まらない幅広い主体の参画求める(段階的整備)。 各地域での事務負担なども考慮し、既存の組織体をベースとすることとし、生活困窮PFと見守り連絡会議を包含して設立する。
⑥	連携 PF の参加者の検討・巻き込み	<p>■庁内連携では継続的なコンタクト、日常的な情報交換を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 定期的に庁内へのメール配信等を実施しており、テーマについて目に触れる機会を作っている。そうすることで担当者が変わっても継続的に関わりのある分野であるという意識を醸成している。日々情報交換を実施している部署もあるほか、他部の別の PF に入るなどのつながりもある。
	巻き込み	<p>■北海道支援情報ナビへの登録を機に、参画を打診する</p> <ul style="list-style-type: none"> 北海道支援情報ナビに新たに登録した民間団体には PF への参画も促す。

(ウ)設立段階

⑦	域内住民・関係団体 への情報発信	<p>■<u>一般の方が行く場所で、関心のあるものと一緒に周知イベントを開催</u></p> <ul style="list-style-type: none">・ 休日のショッピングモールで音楽を交えたトーク形式の啓発イベントを開催。フォロワー数の多い 20 代のユーチューバー、自らひきこもりを経験したインスタグラマーと講師の鼎談を行い、一般道民への孤独・孤立問題とゆるやかなつながりの大切さの理解を促した。・ 広報動画の上映や、道独自の孤独・孤立対策のロゴ、相談先情報付きのグッズの配布を行い、相談窓口の周知も合わせて行った。グッズはメモ帳や冷蔵庫に貼れるクリップといった長く使い、目に触れるものに支援情報を載せ、工夫した。 <p>■<u>著名な講師による研修会を開催し、一般参加者向けに周知活動も合わせて実施した</u> 広域</p> <ul style="list-style-type: none">・ ひきこもりをテーマに道内の市町村や支援者等を対象とした研修会を開催し、課題そのものの周知や、支援方法についての理解を促進した。講演会の前に自治体職員同士対面の情報交換会を開催した。・ 意識の差がみられる中で、ひきこもり等の課題についてまずは知ってもらうことを重視し、聞きやすく、わかりやすい会とすることを目指し、著名な講師により関心をもってもらい、道内の活動が活発ではない地域においても、現状把握や対策に乗り出すきっかけ作りとした。 <p>■<u>チラシ及びカード以外に、トイレ等に張り付けるステッカー、配布用のステッカーを制作し、配布した</u></p> <ul style="list-style-type: none">・ 公共施設における広報活動を実施した。具体的には、チラシ、カード、配布用ステッカー、施設(来庁者トイレ等)貼り付け用ステッカーを作成、配布したほか、研修会やイベント等でも配布した。
⑧	連携 PF の運営	<p>■<u>全道の PF では道本庁が事務局を担い、情報共有、広報・啓発を進める</u> 広域</p> <ul style="list-style-type: none">・ 全道の PF は道本庁が事務局を担い、情報共有、孤独・孤立問題や対策に関する広報・啓発、支援情報の一元化、連携した取組の好事例の共有を実施する。 <p>■<u>振興局の PF では振興局が事務局を担い、地域づくり、つながりづくりに取り組むことが考えられる</u></p> <ul style="list-style-type: none">・ 面積が広大で市町村数も多く、地域の実情や社会資源も様々であることから、「地域課題の把握」や、「地域づくり」、「つながりづくり」の取組を推進することを主な活動とする。・ 小規模な市町村が多い本道の現状を踏まえると、道が設置主体となって 14 振興局単位で、市町村及び関係団体の賛同の下に設置することが考えられる。・ 既存の広域的な連携組織体をベースに発展させていくことが考えられる。

(工)自走段階		
⑨	今年度の積み残し課題	<p>■全道の PF のさらなる拡大、振興局の PF の立ち上げ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全道の PF の参画団体の拡大 ・ 振興局の PF の立ち上げ
⑩	来年度以降の方針	<p>■全道の PF への更なる参加団体の追加のための声かけを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 全道 PF においては、更なる参画団体として、町内会連合会、ライフライン事業者、新聞社、不動産関係団体等への声かけを予定している。 <p>■振興局の PF の立ち上げに向けた準備を進める 広域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 理解が不十分だと、既存施策との違いが曖昧なままの、“ふわっとした”イメージ先行の取組となることや、関係者の熱量に差が生じることで、行き詰まる懸念があることから、地域の関係者すべてが孤独・孤立対策の重要な理念である「予防」や「地域づくり」、「つながりづくり」を十分理解する必要がある。R6 年度に施策説明会を通じて、道本庁から振興局に周知し、振興局から市町村や支援団体に理解を求める。 ・ 適宜道庁において、各地域の取組状況を把握する。

ブレイクスルー要因		
	アクション/ ブレイクスルー要因	<p>■庁内連携の推進、振興局の PF の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 孤独・孤立対策では庁内連携が必要になるが、今年度の本事業に取り組むにあたって、他課にヒアリングをした結果、孤独・孤立と関連のある分野の支援者向け研修に取り組みたいとの意向があったことから、ひきこもりに関する支援者等向けの研修会を開催した。 ・ 結果として、各地でひきこもり支援をしている職員を中心に孤独・孤立対策の状況や PF について情報交換することができたほか、講演会では幅広い関係者に孤独・孤立対策やひきこもり支援について周知することができた。 ・ 全道の PF では、「地域づくり」「つながりづくり」の推進はなじまないことから、各地域の実情に応じた振興局の PF を形成し、全道の PF と役割分担して取組を推進する必要があると考えた。このため、振興局の PF 形成を図ることについて、モデル地域の振興局、支援団体、市と意見交換を実施した。 ・ 結果として、意見交換を踏まえた振興局の PF のあり方を取りまとめることができた。

5.自治体等との打合せ記録一覧

No.	日時	打合せ相手団体
1	11/13(月) 10:30-12:30	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
		北海道庁 保健福祉部福祉局 障がい者保健福祉課
2	11/29(水) 10:30-12:30	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
		北海道庁 保健福祉部福祉局 障がい者保健福祉課
3	1/11(木) 14:00-16:00	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
4	1/19(金) 15:00-16:00	北海道庁 保健福祉部福祉局 障がい者保健福祉課
		北日本広告社
5	1/22(月) 15:30-16:00	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
		北日本広告社
6	1/29(月) 16:00-17:30	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
7	2/15(木) 14:00-15:00	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
		北日本広告社
8	2/22(木) 15:30-16:30	北海道庁 保健福祉部 福祉局 地域福祉課
		北日本広告社

自治体による従前からの取組

■ ほっかいどう孤独・孤立官民連携プラットフォーム

(取組概要)

社会環境の変化による人と人との「つながり」の希薄化やコロナ禍における孤独・孤立の問題の顕在化、今後の更なる深刻化が懸念されることから、行政機関とNPO等支援団体が分野横断的に連携する場として設立された。孤独・孤立対策の推進に向けた啓発、行政機関及び支援団体の活動内容の共有及び業務連携の機会の提供、孤独・孤立対策に関する好取組やノウハウの共有、その他本会の目的を達成するために必要な取組を活動内容とする。第1回の会議を令和5年10月26日(木)に開催した。会議の次第、資料、議事録については、道庁のHPにおいて公開している。

■ 北海道支援情報ナビ

(取組概要)

北海道支援情報ナビでは、困りごとから北海道内の支援情報を検索することができる。

図表 北海道支援情報ナビのLINE上でのページ



試行的事業

① 地域版のプラットフォームのモデル事業

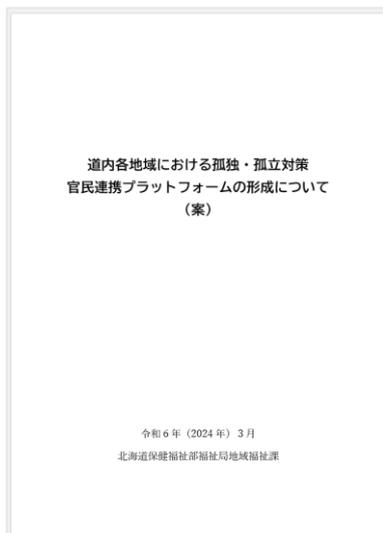
概要	釧路をモデル地域として、市や地域の支援団体に課題認識や現状の取組のヒアリングすると同時に、振興局のPFについて、道としての考えを提示し、方向性や役割分担について意見交換を行い、あり方を整理した。
結果	意見交換により振興局のPFや地域づくりへの期待等を把握し、振興局のPFの立ち上げ時の体制や、参画メンバーの想定、全道のPFとの役割分担等を取りまとめた。
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 意見交換に際しては、孤独・孤立の取組状況や、留意点、検討している方向性について道から丁寧に説明することからはじめた。 今後も道庁や振興局から説明を重ねて地域への拡大を促す。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 振興局のPFの必要性が理解できるように整理すること 負担感を軽減するため、活動趣旨や内容について既存の活動と関連が深いものであることを丁寧に説明すること

振興局のPFのあり方について以下のように取りまとめた。

- 面積が広大で市町村数が最多。地域事情も様々で全道のPFで地域づくりを推進するのはなじまないことから、各地域の実情に応じたPFを形成し、全道のPFと役割分担した取組の推進が必要。
- わかりやすい行政単位、十分な理解、できるだけ負担を少なくすることに留意。
- 道が設置主体となって14振興局単位で設置。
- 生活困窮者支援官民連携PFおよび地域での見守り体制連携連絡会議を包含して、振興局のPFとして段階的に取り組む(社協以外の団体の参画、共同事務局化、福祉分野以外の参画)。

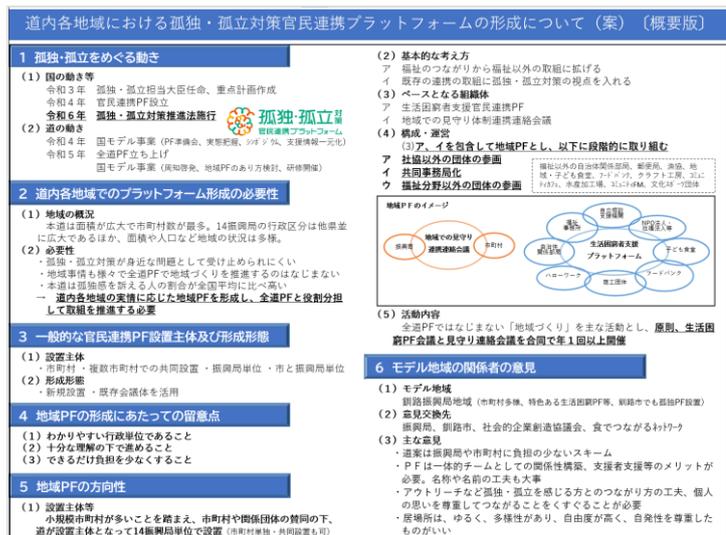
図表 あり方について取りまとめた資料

詳細版 12 ページ



図表 あり方について取りまとめた資料

概要版 1 ページ



② 道内基礎自治体の職員等を対象とした研修会

概要	ひきこもりをテーマに道内の市町村や支援者等を対象とした研修会を開催し、課題そのものの周知や、支援方法についての理解を促進した。 講演会の前に自治体職員同士対面の情報交換会を開催した。
結果	342名が参加し、108名がアンケートに回答した。ひきこもりや孤独・孤立が誰にでも起こりうることを新たに約3割の方が認知したほか、ひきこもりの認識が間違っていた、支援のポイントがわかったなどの感想があった。
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 著名な講師により関心をもってもらい、道内の活動が活発ではない地域においても、現状把握や対策に乗り出すきっかけ作りとした。 同日に情報交換会も実施し、対面で話し合う機会を提供した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 意識の差がみられる中で、ひきこもり等の課題についてまずは知ってもらうことを重視し、聞きやすく、わかりやすい会とすることを目指した。 共通の課題を抱える職員同士が気軽に話せる場を目指した。

(開催概要)

日時:1月29日(月) 場所:北海道札幌市 共済ホール
9:30~第1部:情報交換会、12:00~第2部:講演会

図表 チラシ

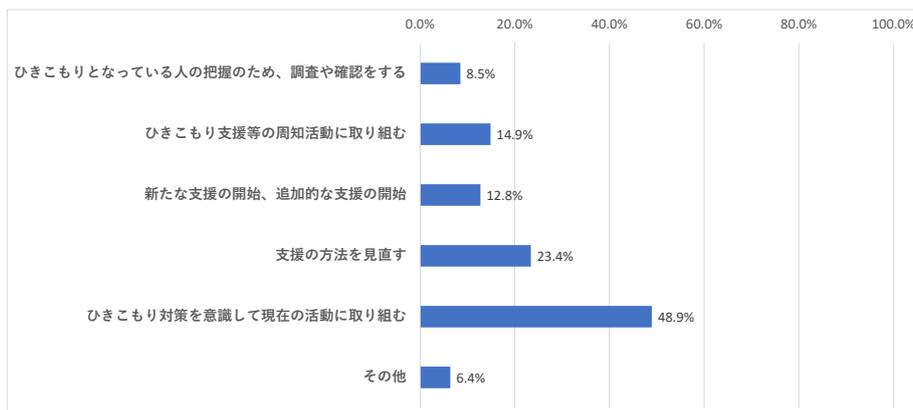
令和5年度孤独・孤立対策地域連携推進事業
2024 1月29日(月) 12:00(正午)~15:00
ひきこもり支援セミナー
共済ホール
札幌市中央区北4条西1丁目
「僕たちにはとらえようとする義務がない」
「ひきこもりについて学びませんか。どなたでも参加無料です。」
筑波大学教授 斎藤環氏
髭男爵 山田ルイ53世氏
社会的ひきこもりとはオープンダイアログで対応したいの？

プログラム
12:00~ 孤絶・孤立とは
説明者 内閣官房孤絶・孤立対策担当室 参与 大西 達 氏
12:10~ 講演1 「僕たちにはとらえようとする義務がない」
講師 髭男爵 山田ルイ53世 氏
13:15~ 講演2 「ひきこもり支援について」
講師 筑波大学医学部系社会精神保健学 教授 斎藤 環 氏
14:20~ 対談および質疑 40分
ファシリテーター: 内閣官房 孤絶・孤立対策室 大西 達 氏
髭男爵 山田ルイ53世 氏
筑波大学医務系社会精神保健学教授 斎藤 環 氏
厚生労働省社会・援護局地域福祉課 ひきこもり専門官 松浦 拓朗氏
お申し込み 北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課精神保健医療係
FAX 011-232-4068 ☎011-204-5279
ふりがな _____
氏 名 _____
住 所 _____ 連絡先 _____
職 業 _____ 年 齢 _____
お申し込み先 <https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/shf/hikikomorisien.html>

(効果検証)

ひきこもりについて理解できたかという設問では、全体の43.5%が「大変よく理解できた」、51.9%が「よく理解できた」と回答しており、9割以上の参加者が理解できたと回答している。福祉支援に携わっていると回答した参加者に「今回のセミナーを受けて今後実施したいこと」を聞いた。「ひきこもり対策を意識して現在の活動に取り組む」が48.9%と最も多く、「支援の方法を見直す」が23.4%、「ひきこもり支援等の周知活動に取り組む」が14.9%、「新たな支援の開始、追加的な支援の開始」が12.8%となり、参加者の行動変容につながる効果が見られた。

図表 「今回のセミナーを受けて今後実施したいこと」に関するアンケート結果



(情報交換会)

- 情報交換会では、各地域の取り組み状況、推計値と支援人数を比べるなどの事前レポートを実施してもらった。
- 道として各地域の状況把握を行うとともに、参加者も悩みやアイデアを共有したり、厚労省のひきこもり専門官より助言をもらい、今後の活動に活かせる場とした。
- 意見交換では、本人に会えず進展がないと感じるという参加者に対して、本人ではなく家族の支援をすればよい、会ってくれたら感謝する位で良いなどの意見が交換された。
- 困っていないケースに介入すべきか迷うという参加者に対しては、困っていなくても本人が欲しい場所、行ける場所を用意したら出てきてくれた、細く長くかかわって SOS に気づけばよいと思うなどの意見が出された。

図表 情報交換会の様子



(講演会)

- 講演会では、大西参与からの孤独・孤立の課題説明、髭男爵の山田ルイ 53 世氏による経験者の目線での講話、筑波大学斎藤先生によるひきこもり支援についての講話を行い、パネルディスカッションを実施した。
- アンケートでは、「ひきこもりの支援は難しいと思っていたが、誰にでも起こり得ることで特別問題視されることではないとわかった」、「ひきこもりが障害や病気ではなく、状態であると知った」などひきこもりへの理解ができた、「マイナスをマイナスとしてそのまま許容することは難しいが大切だと思う」「ひきこもり支援には家族の関わり方が重要」など支援のあり方について理解できたといった感想が聞かれた。
- 登壇者については「専門家、元当事者、行政、NPO と、立場の違う登壇者が良かった」、「登壇者が明るく会場の雰囲気も良く、楽しく聞けた」、「道外の講師から新しい考え方を知れた」等の意見が得られた。

図表 講演会の様子



③ 道民を対象とした啓発イベント	
概要	休日のショッピングモールで音楽を交えたトーク形式の啓発イベントを開催し、一般道民への孤独・孤立問題とゆるやかなつながりの大切さへの理解を促した。ノベルティの配布による相談窓口の周知も合わせて行った。
結果	400 個のグッズを会場にて配布した。78 名の方がアンケートに回答し、2 割が課題そのもの、半数の方が誰にでも起こりうることを初めて知ったと回答した。
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 休日のショッピングモールで、フォロワー数の多い 20 代のユーチューバー、自らひきこもりを経験したインスタグラマーと講師の鼎談を行った。 ・ ピアノ演奏を企画に盛り込み、演奏からはじめて鼎談にうつる構成とした ・ ノベルティは長く使い目に触れるものに相談窓口の QR コードをつけた
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集客できる会場、ゲストで若い世代や関心のない人にアプローチした ・ 演奏で買い物客が足を止めて、そのまま鼎談も聞いてもらえるようにした ・ 日常で悩んだときに手元のノベルティで思い出してもらえるようにした

(実施概要)

日時:2月23日(金・祝)(13時～、15時～) 場所:イオン札幌発寒店すずらん広場

内容:登壇者による孤独・孤立についてのトークセッション、ピアノ演奏、図書の紹介、

40分程度を2ステージ開催

ノベルティ:メモ帳(1枚ごとに支援情報のQRあり)、マグネットクリップ

ゲスト:内閣官房政策参与 大西連さん、YouTuber ピアニストふみさん、インフルエンサー 読書オタなつみさん

図表 開催の様子



図表 会場・ポスター掲示



ショッピングモールで開催することで、家族連れや若い世代にも足を止めてもらうことができた。アンケートでも「イオンでの開催で気軽に参加できるのがよかった」といった声があった。ピアノ演奏を企画に盛り込み、演奏からはじめて鼎談にうつる構成としたことで、演奏で買い物客が足を止めて、そのまま鼎談も聞いてもらえるようにした。20代のユーチューバー、自らひきこもりを経験したインスタグラマーの方に登壇いただくことで、遠方からも登壇者のファンの方に集まってもらうことができたほか、登壇者のSNS等による広報も実施された。アンケートでも「登壇者目当てでできたが参考になる話だった」という声があった。

図表 ポスター掲示に足を止める家族連れ



図表 ピアノ演奏に集まる買い物客



日常で悩んだときに手元のノベルティで思い出してもらえるように、ノベルティは日常の中で長く使えるものに相談窓口の QR コードをつけた。

図表 メモ帳



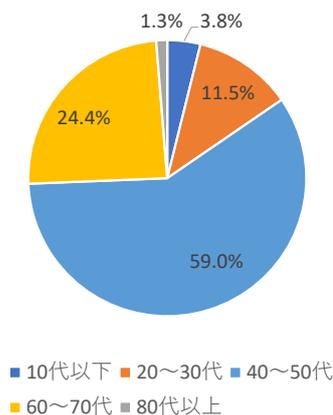
図表 マグネットクリップ



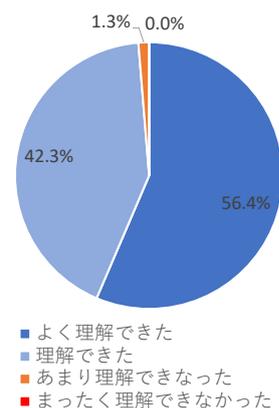
(効果検証)

参加者のアンケートには 78 名が回答した。回答者の年齢は、40~50 代が最も多く、59.0%、ついで、60~70 代が 24.4%、20~30 代 11.5%、10 代以下 3.8%となっており、若年層にも周知活動としてアプローチすることができた。つながりの大切さについて理解を深めることができたかという設問では、「よく理解できた」56.4%、「理解できた」42.3%となっており、ほとんどの人がつながりの大切さについて理解を深めることができたと回答した。

図表 回答者の年齢



図表 つながりの大切さの理解度



④ 孤独・孤立に関する広報ツールの作成	
概要	孤独・孤立対策の機運を醸成するために、道独自のロゴマークやポケットティッシュ、広報動画を作成、研修会やイベント、各地域で配布した。関係課の意識啓発のためにロゴマーク入りのシャープペンシルを作成し配布した。
結果	ポケットティッシュを2回のイベントで約1,000個配布、道内市町村や関係機関に送付し各地域でも配布した。広報用の動画をイベントの集客に活用した。
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> 印象的なロゴを制作し、ティッシュ、ポスター、シャープペンシルを作成した。 ロゴマーク、QRコード、メッセージ入りのポケットティッシュの配布により、取り組みそのものや支援情報等を周知した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 受け取ってもらいやすいグッズとしてポケットティッシュを配布した。 広報用の動画を制作して繰り返し放映することで、目にしたり耳にする人が増えるようにした。

ロゴは北海道らしく手袋をイメージしたものを選定し、孤独・孤立の寒い心を温める支援があることを表現。暖色の色と、優しい微笑みのように見えるデザインで、安心感を与えるマークとなっている。ポケットティッシュを制作し、各地域、研修会・イベントで配布した。関係課の意識啓発のためにロゴマーク入りのシャープペンシルを作成し配布した。

図表 ロゴデザイン



図表 ポケットティッシュのデザイン

図表 ロゴマークを使用したグッズ



図表 シャープペンシルのデザイン

継広報用に、動画(15秒版と30秒版の2通り)、デジタルポスターを制作した。動画については、イベントにおいて放映し、ショッピングモールの買い物客の注目を集めることができた。今後も道庁のサイネージ等での継続的な広報活動に使用する。

図表 動画(一部切り取り)



⑤ 北海道支援情報ナビの広報活動	
概要	普及促進のため、昨年度の自治体窓口だけでなく、公共施設における広報活動を実施した。作成したグッズはイベント等でも配布を行った。
結果	公共施設では、立ち止まってチラシ等を見たり手に取る姿が見られた。啓発イベントのアンケートでは、87%の人が初めて支援情報ナビを知ったと回答した。
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> • チラシ、カード、配布用ステッカー、施設(来庁者トイレ等)貼り付け用ステッカーを作成・配布したほか、研修会やイベント等でも配布した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> • ステッカーにすることで、継続的な利用を目指す。ポップでかわいいステッカーにすることで、チラシ等よりも興味を持ってもらっている。

支援情報ナビの普及促進を行うため、昨年度の自治体窓口に加えて、公共施設における広報活動を実施した。具体的には北海道庁において、庁舎内の廊下や1階の広報コーナーに設置した。

図表 チラシ、カードの設置の様子



ステッカーを来庁者用トイレなど一般の道民が利用する場所に張り付けることで、継続的に北海道支援情報ナビの周知活動が行えるようにした。

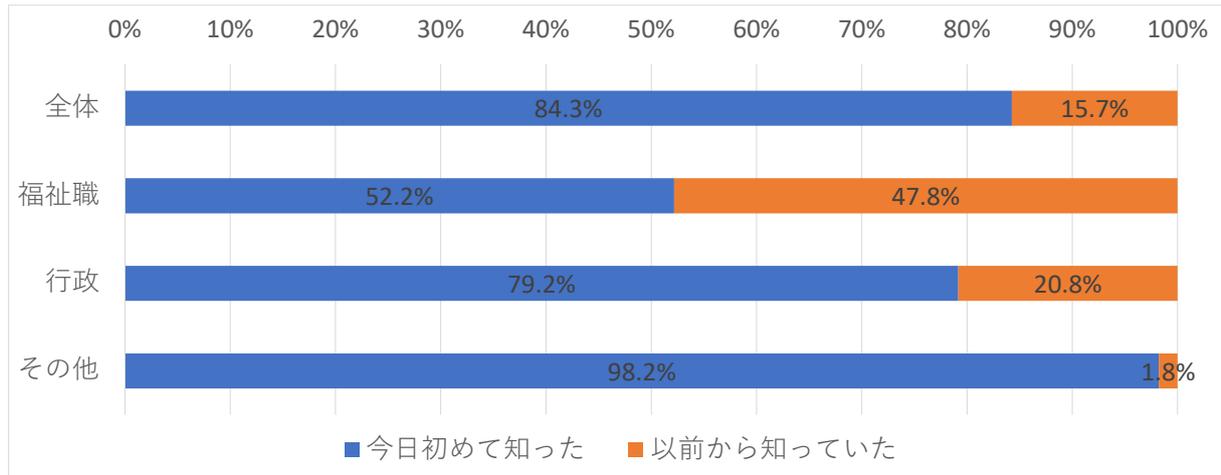
図表 北海道庁におけるトイレへのステッカーの貼り付けの様子



(効果検証)

作成したグッズはイベント等でも配布を行った。試行的事業②の「道内基礎自治体の職員等を対象とした研修会」では、84.3%の人に新しく北海道支援情報ナビを知ってもらうことができた。もともと知っていたと回答した人のうち、47.1%は研修会や会議などで知ったと回答しているが、41.2%がチラシやカード、シール等の配布物で知ったと回答しており、今までの広報活動の効果も確認された。試行的事業③の「道民を対象とした啓発イベント」では、87.2%の人に新しく北海道支援情報ナビについて知ってもらうことができた。

図表 (ひきこもりセミナーにおけるアンケート調査より)北海道支援情報ナビの認知率



図表 (ひきこもりセミナーにおけるアンケート調査より)どこで北海道支援情報ナビを知ったか

